

貧困を語ることの限界：

J. K. ローリング『カジュアル・ベイカンシー』論

大桃 陶子

J. K. ローリングが《ハリー・ポッター》シリーズ完結後に出版した最初の長編小説『カジュアル・ベイカンシー』（2012）は、現代イギリスが抱える貧困問題を扱う作品として、またローリングの貧困問題に対するスタンスを問う作品として注目に値する。現代イギリスがかかえる問題——アンダークラス、ドラッグ、ヘロイン、DV、児童虐待、10代の妊娠、売春、人種差別——をこれでもかと扱っているために、ブレイディみかこには「ダークで不条理なピカレスク小説」（39）と呼ばれている『カジュアル・ベイカンシー』は、公営住宅地の荒れた下層社会と、偏狭で物質主義で外見を取り繕うことしか考えていない地方のミドルクラスの対比を描く階級小説である。タイトルの「カジュアル・ベイカンシー」とは、「偶発的な空席」を意味する政治用語で、議会や委員会を構成するメンバーの突然の死や辞任により、議席に空席が生じることを意味する。物語の舞台は、バグフォードというイギリス西部の架空の町で、誰からも好かれていたバリッシュ・カウンシル議員バリー・フェアブラザーが急死するところから始まる。彼の死によって空席となった議席の後任を決める選挙を巡って、住人たちの間に衝突が起こる。特に、バリーが支援していた貧困層向けの住宅街フィールズを、財政上・治安上の理由でバグフォードから切り離すかどうかで派閥間の対立が深刻化する。

『カジュアル・ベイカンシー』は、ローリングらしからぬ小説である。ハリー・ポッターに代表される彼女の主要作品には、敵と味方がはっきりと分かれているという特徴がある。主人公は仲間にも囲まれており、「こちら側」の人びとは善良であり、決して主人公を裏切らず、味方同士の連帯がしっかりと結ばれている。それに対して、主人公を敵視して嫌がらせを

仕掛けてくる「あちら側」の人間は、卑劣で横暴でありながら実は臆病者であることが多い。特に年少の主人公に執着するいじめっ子は、物語の終盤にいよいよ追い詰められた際には無様にも泣いてしまう。したがって、ローリング作品の読者は、どちらが最終的に勝利をおさめ、どちらがみじめな姿をさらして敗北するのかをはっきりと予測することができるのである。しかし、『カジュアル・ベイカンシー』においては、この構図はほぼ成立しない。この大人向けの小説の登場人物たちは、それぞれが問題を抱えており、完璧な善人も悪人も存在しない。登場する夫婦やカップルはことごとく破綻しており、物語において重要な役割を果たす高校生たちの交友関係も不安定である。住人のほとんどが顔見知りであるという地方の町特有の閉塞感の中、あらゆる人間が誰かしらといがみ合っているのだ。

とはいえ、もし『カジュアル・ベイカンシー』においてローリング作品らしいキャラクターを探すとしたら、それはスチュワート・ウォール、通称ファッツと呼ばれる少年だろう。彼は、バグフォードの就学児のほとんどが通うウィンターダウン総合中等学校の副校長であるコリン・ウォールを父親に、同校の生徒指導部の主任であるテッサ・ウォールを母親に持つ少年だが、父親に対して反抗的な態度をとり、周囲の人間にたいしても過度に攻撃的なふるまいを見せる。彼に注目するのは、ファッツがテキストの終盤において、まさにローリング的「悪役」にふさわしく、自分が取り返しのつかない間違いを犯したことを認め無様に鳴き声をあげることによって、読者にカタルシスをもたらすためである。

“Is he dead? Her brother?”

Andrew had not realized that Fats did not know.

“Yeah,” he said, and then he added, “I think so. That’s what I——what I heard.”

There was a silence, and then a soft, pig-like squeal reached him through

the darkness. (emphasis mine, 600)

ファッツ少年が「弱々しい豚のような鳴き声」をあげるのは、彼が交際していたクリスタル・ウィードンの弟、ロビーが川で溺死したことを知らされたためである。ファッツと同じ学校に通うクリスタルは、フィールズの貧困家庭に生まれ育ち、数々の問題を抱えた母親に代わって5歳の弟の面倒をみている。彼女は『カジュアル・ベイカンシー』における貧困問題の象徴とも言うべき、中心的キャラクターの一人である。ファッツとクリスタルの二人が野外で性行為に及んでいる間、その場から追いやられたロビーは退屈し、辺りをさまよっている途中で川に落ちてしまう。ロビーがいないことに気づいたクリスタルは半狂乱になって弟を探し回るが、ファッツは取り乱した彼女を置いてその場から逃げ出してしまうのである。このように読者が「正しく」嫌悪感を覚えることが許されているファッツは、実はこの小説が貧困という問題にどう対峙しているかを考えるうえでも重要なキャラクターでもある。

本稿では『カジュアル・ベイカンシー』における貧困問題を考察するうえで、まず貧困家庭出身であるバリー・フェアブラザーの死によってもたらされるフィールズ問題の膠着化ついて論じる。次に、ローリングがこの小説において直面した貧困を語ることの困難について考察する。ローリングは、嬉々としてミドルクラスの階級差別を槍玉にあげる一方で、貧困そのものに対しては、扱いかねていると考えられる。例えば、弟の死に責任を感じたクリスタルは、自宅で過剰な量のドラッグを摂取して自殺するのだが、これはクリスタルを通じてローリングが貧困に対す解決策を提示することを断念しているのだと言えるだろう。また、クリスタルの母親であるテリを描くことの困難にも触れる。最後に、ファッツという登場人物に注目し、彼を通じて貧困という現象を見つめてきたローリングの語りの限界について考察していきたい。

I

小説の冒頭で動脈瘤破裂のため急死するバリー・フェアブラザーは、貧困地区のフィールズ出身でありながら高等教育を受け、ミドルクラスのコミュニティに受け入れられ、階級上昇を果たした人物である。貧困という状況から自分の実力だけで運命を切り開いたバリーは、この小説におけるヒーローである。しかし、彼は早々に姿を消し、周囲の人間は彼の不在によってにわかに発生したバグフォードの地方自治組織会議の空席を埋める騒ぎに巻き込まれる。つまり、『カジュアル・ベイカンシー』は「ハリー・ポッター」的ヒーローの死から始まるのだ。

リーダー的存在のバリーを失い、フィールズをバグフォードから切り離して社会保障費を削減することに反対していた彼の遺志を引き継ぐはずの仲間たちは、しかしバリーに執着しているだけで、貧困地区やそこに住む人々のことを真剣に思っているわけではない。亡くなったバリーのパリッシュ・カウンシルでの空席を埋めるための選挙に立候補することになるコリン・ウォールは、不器用でいつでも物笑いの種になる自分を受け入れてくれたバリーを親友とみなし、彼への忠誠心から後継者になることを決意する。パーミンダー・ジャワンダ医師は、夫がいる身でありながら密かにバリーに恋心を抱いており、彼がやろうとしていたことをコリンを選挙に勝たせることで実現しようとしている。このような二人の欺瞞を見破るのは、コリンの妻でありパーミンダーの友人であるテッサである。テッサは、彼女の家に集まって議論を重ねるにつれ自分たちの勝利を確信する彼らを醒めた目で見つめる。

They're completely deluded, Tessa thought, looking at the other three, who were poring over some graph that Parminder had extracted from Kay's notes. They think they'll reverse sixty years of anger and resentment with a few sheets of statistics. None of them was Barry. He had been a living example of what they proposed in theory: the advancement, through education, from poverty to affluence, from powerlessness and dependency

to valuable contributor to society. Did they not see what hopeless advocates they were, compared to the man who had died? (475-476)

テッサは、バリーの政策を体現しているのはバリーしかおらず、バリーが彼の仲間の誰ひとりとして並び立つことのできない存在であったことを理解している。バリーというヒーローを失うことによって、彼がまとめ上げていた仲間たちもばらばらになり、彼が解決しようとした貧困問題もモデルクラスの人間によって構成されるパリッシュ・カウンシルでは議論されることなく、冷酷に切り捨てられることになるのは明白なのだ。

バリーが死の直前まで気にかけていたのは、地方紙〈ヤーヴィル・アンド・ディストリクト・ガゼット〉に送ることになっているクリスタルの女子ボート部での活躍を紹介する記事のことであった。クリスタルは貧困地区に生まれ育った早熟な少女で、周囲の人間の「あざけりとみだらなジョークの標的」(32)になっている。パグフォードの狭いコミュニティの中では札付きの不良少女とみなされている彼女だが、バリーはそんな彼女に目をかけどうにかして貧困から引き上げようとしていた。そしてクリスタルが通う中学校の女子ボート部のコーチとして尽力した後、女子ボート部はセント・アンという私立校との遠征試合で見事勝利したのである。この出来事は、クリスタルの胸にも人生最良の日として刻まれている。ここでクリスタルは、チームメイトとも友好な関係を築き、タフで有能な漕ぎ手として皆の尊敬を集めていた。そこでバリーは、落ちこぼれのレッテルを貼られ続けていたクリスタルがセント・トーマス校に通うことによって輝かしい成果をあげたことを記事にしようとしていたのである。クリスタル自身はバリーの意図を正確に理解しているわけではなかったが、それでもバリーには感謝の念を抱いている。『カジュアル・ベイカンシー』において特に残酷なのは、クリスタルの更生を象徴する輝かしいシーンである女子ボート部の試合の思い出が、バリーの死によって取り戻すことのできない過去になってしまったことを明確に提示している点である。貧困を克服するという偉業を成し遂げる次世代のヒーローであるべきクリスタル

は、小説の冒頭から貧困という檻から抜け出す可能性を否定されているのだ。

II

『カジュアル・ベイカンシー』が貧困に打ち勝つヒーローの物語であることを放棄しているのだとしたら、この小説は貧困という問題にどのように向き合っているのであろうか。パグフォードという小さなコミュニティが中心となるこの小説において、貧困地区フィールズは胡散臭い外部として位置付けられている。そして『カジュアル・ベイカンシー』が浮き彫りにするのは、パグフォードの大多数の人間が抱く労働者階級への強い偏見である。ミドルクラスの間が貧困に関して徹底して無知であり、またそのことに何の疑問も抱いていないことは、ハワード・モリソンという登場人物を通して痛烈に批判されている。ハワードはバリーの不倶戴天の敵であり、バリッシュ・カウンシルの議長にしてパグフォードの首席市民である。高級デリカテッセンの経営者でもあるハワードは、典型的なミドルクラスの価値観を持つスノップであり、自分の愛する町から貧民を一掃したいと考えている。

Howard carried the mental image of the Fields with him always, like a memory of a nightmare: boarded windows daubed with obscenities; smoking teenagers loitering in the perennially defaced bus shelters; satellite dishes everywhere, turned to the skies like the denuded ovules of grim metal flowers. He often asked rhetorically why they could not have organized and made the place over——what was stopping the residents from pooling their meager resources and buying a lawnmower between the lot of them? But it never happened: the Fields waited for the councils, District ad Parish, to clean, to repair, to maintain; to give and give ad give again. (75)

ハワードの考えによれば、フィールズの住民は目も覆いたくなるような

劣悪な環境で、生活保護に頼って暮らしており、怠惰で自分で働こうという気概など持ち合わせていない。そして公的機関が彼らを養ってくれることを当然のことと思っており、真面目に働く人間の税金を無駄に消費していることに何の罪悪感も抱いていない。これは、オーウェン・ジョーンズが『チャヴ』(2011)において論じた典型的なミドルクラスによる労働者階級差別であると言えるだろう。『カジュアル・ベイカンシー』において重要な点は、この小説が『チャヴ』と同じく、貧困や失業といった労働者階級の苦境を「特権階級を利するようにつくられたきわめて不平等な社会が原因ではなく、個人の性格の問題である」(10)として、彼らの「やる気のなさ」や「向上心」の欠如に原因を求めるようなミドルクラスの人々の姿勢を徹底して批判しているということである。

このことは、労働者階級がだらしのない性格ゆえに自分たちの住む町の整備すらできないと考える典型的なミドルクラスの価値観をもつハワードという人物が、実は自身も性格的な欠陥を抱えていることによって示されている。「旺盛な食欲こそ男らしさの表れ」(157)であるとするハワードは、肥満が原因で心臓のバイパス手術を受けたことがあり、腹部に段ができたことによって発した湿疹に悩まされている。かかりつけ医であるパーミンダー・ジャワンダに体重を落とさなければならないと指摘されても、彼は生活習慣を変えようとしなない。これは、後にパリッシュ・カウンセルで二人が言い争いになったとき、ドクター・ジャワンダが医師としての守秘義務をかなぐり捨てて糾弾したように、ハワードが「体重を落とすことを拒否する」という性格的欠陥のために、「莫大な金銭的負担を国の医療保険制度に強いてきた」(226)ことを示している。つまり、ハワードも彼が毛嫌いするフィールズの人間のように、個人の甘えから国に寄生する存在であることが白日の下にさらされてしまうのだ。

また、パグフォードというコミュニティにおいても、家庭においても権力者としてふるまうハワードは、実は道徳的にも非難されるべき人物である。彼はかつてのビジネスパートナーの未亡人であるモーリーンを長年の

間デリカテッセンで雇っているが、ハワードとモーリーンの二人はずっと昔から妻のシャーリーの目を盗んで不倫関係を続けている。このことは、彼の娘であるパトリシアがまだ12歳の時に父親の不倫現場を目撃してしまい、母親には内緒にするようにと5ポンド札を与えられたというエピソードによって、強烈に印象付けられている。そして、最終的にはこの事実は町中に知れわたることになり、結果としてハワードはそれまで彼に忠実だった妻の信頼を失ってしまうのである。そして、小説の最後で再び心臓発作に襲われた彼は、入院先で機械につながれ、今や彼のことを憎むようになった妻に世話をされなくてはならなくなる。このように、ハワードのいわゆる自己責任論は、その非人道的性質ゆえに報いを受けることになるのだ。

ハワードに代表されるミドルクラスの偏見を批判する一方で、この小説が貧困問題を真正面から描いたり、労働者階級の人間の視点から社会の問題点を描いているわけではないということは見過ごしてしまっていていい問題ではない。ローリングはあくまで同じ階層の人間の傲岸不遜な態度や無知を糾弾しているのであり、下層階級の人間の救済を模索しているわけではない。まず中心的登場人物の一人であるクリスタルは、「彼女が求める道を示してくれた唯一の大人」(123)であるバリーが亡くなった後は、目指すべき方向性を見失い、最終的には自殺してしまう。

またクリスタルの母親であるテリ・ウィードンは、まさに貧困を象徴する登場人物として注目に値するだろう。彼女はシングルマザーで、クリスタルとロビーの二人の子どもと暮らしているが、他にも何人かの子どもの複数の男性との間にもうけている。ロビーを取り上げられることを拒み薬物中毒のクリニックに通っているが、5歳の息子の世話のほとんどを娘のクリスタルに任せっぱなしにしている。生活保護受給者であり、昔の仲間のおちょっとした悪事に協力したり、売春をすることで小遣いを稼いでいるテリは、ソーシャルワーカーのケイ・ボードゥンが彼女の家を初訪問した際に、初めて読者の前に姿を現す。

The door swung open to reveal a woman who appeared simultaneously childlike and ancient, dressed in a dirty pale-blue T-shirt and a pair of men's pajama bottoms. She was the same height as Kay, but shrunken; the bones of her face and sternum showed sharply through the thin white skin. Her hair, which was home-dyed, coarse and very red, looked like a wig on tops of a skull, her pupils were minuscule and her chest virtually breastless. (82)

このように語り手はテリという女性の外見を詳細に語るが、この一連の描写においてテリが読者の憐れみ、もしくは好奇心な視線を向けられる対象であることを否定することは難しい。クリスタルと同じ女子ポート部に所属していたスクヴィンダーは、「あばただらけの腕と歯の欠けた」(631)テリが、「死体」に話しかけているようで怖かったと振り返っている。両親ともに医者というミドルクラスの家で育ったスクヴィンダーにとって、テリは異様な外見をした得体の知れない存在なのである。

テリ自身の内面が語られるのは、この数多くのキャラクターが登場してかわるがわる内面を開示するこの小説においてわずか一章分に過ぎない。そこでは、彼女の祖母であるキャスバあちゃんが亡くなった知らせを受けて、彼女が11歳だったときの記憶が何度も甦ってくる様子が描かれている。テリは共に暮らす父親にひどい火傷を負わされて6週間入院した後、キャスバあちゃんの家で三日間過ごしたものの、彼女を性的にも搾取する父親の家に連れ戻されてしまう。このとき、祖母に見捨てられたと感じた記憶、そして祖母が自分よりもクリスタルに目をかけていたこと、そしてテリの行状にあきれ果てた祖母が最後に彼女に欠けた言葉（*'I'm washin' my' ands of yeh. I've' ad enough, Terri, I've' ad it.'*）が何度もテリの意識に押し寄せ、彼女の孤独と荒廃した精神状態を明るみに出す。そして残酷なことに、語り手はそれ以降このテリという登場人物を完全に突き放す。『カジュアル・ベイカンシー』の最後では前述したように、テリに残された子どもたちが二人とも死んでしまうのだが、そのような悲劇をテリがど

う受け止めたかは一切描写されていない。一方で、川に落ちたロビーを助けようとして自分も川に飛び込んで負傷し、結果として英雄扱いされることになったスクヴィンダーがクリスタルたちの葬儀の演出を手掛けるのだが、母親であるテリは子どもたちの葬式には一切の関心を示さず、スクヴィンダーの案を丸呑みにする。その様子は、「やつれはて、不潔で、一言二言しか話さず、完全に受け身であった」(631)。そして、『カジュアル・ベイカンシー』は、次の一文で幕を閉じる。

Her family half carried Terri Weedon back down the royal blue carpet,
and the congregation averted its eyes. (639)

葬儀に集まった人々が呆然自失状態のテリの姿から目をそらしたように、テキストもまた彼女の救済の可能性から目を背けてしまうのである。

このような態度は、作者のJ.K.ローリング自身の経験にも基づいていると考えられるだろう。グロスターシャー州の典型的なミドルクラスの家庭に生まれたローリングは、母親が難病を患ったことに端を発する家庭内不和に悩まされながらも、エクセター大学に進学し、フランス語と古典を学ぶ。大学卒業後、アムネスティ・インターナショナルで秘書として働いたのち、ポルトガルに渡り英語教師となる。そしてそこで出会った男性との短い結婚生活を経たのち、長女を連れて妹のいるスコットランドのエディンバラに移り住む。この時期は貧困と心労のためうつ病を発症し、生活保護を受ける下層階級のシングルマザーとしてどん底の生活を送っていた。このとき何度か自殺を試みる一方で、エディンバラのカフェで世界的なベストセラーとなる《ハリー・ポッター》シリーズの第一作を書きあげる。そしてローリングは自身の物語の力によって、大成功を収める。そして数々のプレッシャーを乗り越え、《ハリー・ポッター》シリーズを終了させてから、初めて世に問うたのが『カジュアル・ベイカンシー』であった。

一度その身をもって貧困を体験した故に、ローリングはテリ・ウィードンのような下層階級の女性を自分の小説に取り組むことができたのだら

う。しかし、ローリングが貧困層に向ける視線は、あくまで他者に向けるものであり、彼女の語りはまた、その他者が置かれた苦境を解決するための解答を持ち合わせていないことに対して自覚的である。ローリングはミドルクラスの間が貧困層に抱く態度を嫌悪しつつ、その実、彼女自身の立ち位置はあくまでミドルクラスにあるのだ。『カジュアル・ベイカンシー』においてハワード・モリソンに象徴されるミドルクラスの価値観が辛辣に非難されるのは、同族嫌悪に端を発しているのではないかと考えられる。そして、ローリングがハワード・モリソンと同じくらいの敵意を向けているのが、ミドルクラスの少年ファッツである。

III

冒頭で述べたように、ファッツは小説の最後で物語に成敗される役割を割り当てられた、ローリング作品にかかせない敵役であるが、『カジュアル・ベイカンシー』においては、非常に特異な登場人物である。例えば、ファッツの友人であるアンドルー・プライスが考えていることと言えば、父親の日常的なDVにさらされる生活に耐えかねて父親に復讐をもくろむことと、一目で彼を魅了した時期外れの転校生ガイア・ボードウンのことばかりである。アンドルーと比較すると、ファッツという少年が何を求めているのかは一見するとわかりにくい。養父であるカビーに反抗してわざと不良のようなふるまいをしている一方で、彼がこだわっているのは「オーセンティック」であることだ。

The difficult thing, the glorious thing, was to be who you really were, even if that person was cruel or dangerous, *particularly* if cruel and dangerous. There was courage in not disguising the animal you happened to be. On the other hand, you had to avoid pretending to be more of an animal than you were: take that path, start exaggerating or faking and you became just another Cubby, just as much of a liar, a hypocrite. *Authentic* and *inauthentic* were words that Fats used often, inside his own head; they

had laser-precise meaning for him, in the way he applied them to himself and others. (emphases original: 92)

ファッツは、彼が軽蔑するカビーのような偽善者ではなく「本物」であるためには残酷で危険なことをすればするほど望ましい、と考えている。彼は、生徒たちの間で人気があるとは言い難い中等学校の副校長である養父を、同級生を相手に積極的に貶める。弁が立つ彼は、周囲の人間に一目置かれているのだが、その実ファッツ自身は自分の脆さを隠すことに必死になっている。重要な点は、そんなファッツがオーセンティックであることを求めて接近していくのが、貧困地区のフィールズであり、そこの住人であるクリスタルであるということだ。つまり、ミドルクラスの家庭に嫌悪感を抱く彼の冒険とは、貧困地区という未開の地にわけいっていくという行為を指している。

コナン・ドイルから T.S. エリオットまでのロンドンの都市文化を描いた作品を分析したジョゼフ・マクローリンによれば、それらの作品に登場する貧民地区イースト・エンドはおぞましくも人を惹きつけてやまない「都会のジャングル」として捉えられてきた。そしてジャック・ロンドンの『どん底の人びと』を論じた章において、マクローリンはイースト・エンドに拠点を構え、貧民に交わって暮らした作家ロンドンの態度が、冒険者としての側面を持っていたことを指摘している。『カジュアル・ベイカンシー』におけるイースト・エンド的な場所をフィールズだとすれば、得体の知れない貧困の地に足を踏み入れようとするファッツは、19世紀末のロマンス小説に登場するようなマッチョな探検者としての役割を担っているのだと考えられる。ただし、ここで留意しなければならないのは、ファッツのオーセンティックなものを求める冒険は、ホームズやワトソンを主人公とするような冒険小説のグロテスクなパロディに過ぎないということだ。

ファッツがフィールズに関心を抱いているのは、彼がウォール家の養子であり、本当の母親はあまりにも若くして妊娠したフィールズ出身者な

のではないかと推測しているためと示唆される。¹ とはいえ、ファッツはフィールズで彼の本当の母親を探したりはしない。彼がオーセンティックなものを知るために最初に行くことは、クリスタルに声をかけて二人きりで会う約束を取りつけることである。そのことを同級生にからかわれたファッツは、彼らに対して自分の優位性を示すために次のように答える。

His targeting of Krystal had been a deliberate act; and he had his cool and brazen resort ready, when it had come to facing his mates' jeers and taunts. "If you want chips, you don't go to a fucking salad bar."

He had thought out that analogy in advance, but he had still had to spell it out for them.

"You boys keep wanking. I want a shag."

That had wiped the smiles off their faces. He could tell that all of them, Andrew included, were forced to choke down their jeers at his choice, in admiration of his unabashed pursuit of the one, the only true goal. (98)

10代の少年であるファッツにとってオーセンティックであることのひとつは、セックスを経験することである。そして自意識過剰なファッツは、その身も蓋もない欲求を口にしたことによって、親友のアンドルーをはじめとする同級生たちに、彼に対する尊敬の念を抱かせることに成功したとほぼ確信する。しかし、ファッツがクリスタルを容易に攻略できる性的な対象としか見ていないことは明らかである。

ファッツは、クリスタルが何が求めているかをきちんと理解した上で適切な援助をしていたバリーとは異なり、クリスタルという個人については驚くほど無関心である。そのことは、彼がクリスタルの家に呼び出された際、彼女の家の想像を絶した荒廃ぶりと悪臭にショックを受けながらも、それを必死に隠そうとするくだりにおいて明らかである。ファッツは、自分の交際相手の暮らしや、貧困家庭で暮らすことがどうということなのかということなど想像すらもしなかったのだ。

また、ファッツがオーセンティックであるために毎日欠かさず行ってい

ることが、スクヴィンダー・ジャワンダの SNS に彼女を揶揄する書き込みをすることであることは示唆的である。地方都市には珍しい非白人で、ディスレクシアをもつスクヴィンダーは、ファッツが勤勉に書き込んでくる「両性具有者」、「レズビアン」といった嫌がらせの言葉を苦にして、家族が寝静まってから剃刀でリストカットを繰り返すようになる。ファッツに書き込みを見せられたアンドルーは、ファッツが目上の相手やうぬぼれ屋に対してではなく、明らかにいじめの標的になりやすいスクヴィンダーを攻撃する友人に居心地の悪さを感じる。このように弱い者いじめを続けるファッツが、自らの行為をオーセンティックなものに近づくために必要なものだと考えているのだとしたら、それはなぜだろうか。ここでローリングが行っていることは、大英帝国を股にかけた19世紀のロマンス小説の主人公たちが、つまるところは白人男性であるという特権を振りかざして、性的、人種的、経済的弱者を搾取していた側面をもつことを明らかにするということである。そして、生半可な態度で貧困問題に手を出すことの危険性と暴力性をファッツの軽薄さによって示しているのだと結論づけることができるだろう。²

このように、『カジュアル・ベイカンシー』は貧困問題に取り組みながら、貧困問題に取り組むことの困難さを描いた小説である。このように社会問題を扱う作風は、ロバート・ガルブレイスの名で発表している《コモラン・シリーズ》に受け継がれているが、ローリングが貧困問題に対して今後どう取り組んでいくのかという動向は、これからも注目し値すると言えらるだろう。

Notes

1. ただし、TVドラマ版の『カジュアル・ベイカンシー』ではファッツは、自分は父親に代表されるような中流階級のリベラリズムに対して抵抗しているのだと明言している。
2. キットレッジとレニーによれば、ローリング作品に登場するいじめっ

子は生まれながらの悪人ではなく、親の影響を受けていたり、改心するパターンが多い。つまり、ファッツには更生の可能性が残されているということになる。

Works Cited

- Jones, Owen., *The Cavs: The Demonization of the Working Class*, London: Verso, 2011.
- Kittredge, Katharine and Carolyn Rennie, “Old-School Bullies at Hogwarts: The Pre-Victorian Roots of J. K. Rowling’s Depictio of Child-on-Child Violence,” *Cruel Children in Popular Texts and Cultures*, London: Palgrave, 2018, 81-103.
- McLaughlin, Joseph., *Writing the Urban Jungle: Reading Empire in London from Doyle to Eliot*, Charlottesville: UP of Virginia, 2000.
- Rowling, J.K., *The Casual Vacancy*, New York: Little Brown, 2012.
- The Causal Vacancy*, Dir. Jonny Campbell, Warner Bros, 2015.
- ブレイディみかこ 『ザ・レフト—UK 左翼セレブ列伝』 Ele-king Books, 2014年。